

日英映画交渉史——吉澤商店を事例として

笹川慶子

現在、日本の映画市場シェアは、欧州やアジアの多くの国と異なり、国産映画優位の状況が続いている。しかし、その草創期はまるで違っていた。日本のスクリーンはフランスやイタリア、デンマーク、アメリカなど外国映画にほぼ独占されていたのである。しかもそのほとんどの映画は、製作国に関係なく、イギリスから輸入されていた。

日本の映画言説でイギリスが言及されることは少ない。とくに第一次世界大戦前はフランス映画やイタリア映画が注目され、大戦後はドイツ映画やアメリカ映画への言及が増えるものの、イギリス映画に光が当てられることはまれだった。イギリス映画の輸入量はフランスやアメリカと比べわずかにすぎず、公開されても興行的、批評的に低調で、積極的な議論も研究はほとんどなかった。しかし作品や言説ではなく産業に目を向けるならば、イギリスは日本にとって最も重要な国だったのである。

本研究の目的は日本映画産業基盤の形成に重要な役割を果たしていたにもかかわらず、注目されてこなかった日英映画交渉の歴史を明らかにすることである。具体的には日本映画産業草創期中核企業である吉澤商店を事例として、日本企業がイギリスで、いつ、どのような活動を展開していたかを跡づける。それにより日英映画交渉史の一端を紐解くとともに、日本映画産業の近代化が日英交渉によって支えられていたことを指摘したい。そこでまずは日本映画産業の形成と発展をグローバルな視点から捉え直し、その文脈に吉澤商店を位置づける。次に発掘した史料をもとにロンドンでの吉澤商店の軌跡を浮かびあがらせる。最後は日本映画産業の形成発展に果たした日英映画交渉の重要性を考

察する。

1 日本映画産業基盤の形成と吉澤商店

吉澤商店が古美術や幻燈など従来の業務に映画を加えるのは1897年である。以下では、日本で映画産業が形成される過程を製作、興行、供給の三つの側面から捉え直し、そこに吉澤商店を位置づける。

日本映画製作の幕開けと吉澤商店

近代科学技術の産物である映画装置が日本に輸入され、一般に公開されるのは1896年末から1897年初頭にかけてである。日本の映画史研究において、装置を輸入した会社は次の5つとされている¹⁾。

輸入者	装置名	興行場所	興行日	購入先
高橋銃砲店 高橋信治	エジソン社 キネトスコープ	神戸神港倶楽部	1896年11月25日～12月1日	神戸リネル商会 (英国)
荒木商店 荒木和一	エジソン社 ヴァイタスコープ	大阪新町演舞場	1897年2月22日～24日	米国エジソン社
稲畑染料店 稲畑勝太郎	リュミエール社 シネマトグラフ	大阪南地演舞場	1897年2月15日～28日	仏国リュミエール社
新居商会 新居三郎・ 櫛引弓人ら	エジソン社 ヴァイタスコープ	東京神田錦輝館	1897年3月6日～22日	ダニエル・G・クロウス (米国)
吉澤商店 河浦謙一	リュミエール社 シネマトグラフ	横浜湊座	1897年3月9日～12日	ブラッチャリーニ (伊国)

こうした装置や映画を輸入したのは博覧会や留学などで渡航経験のある裕福な商人たちだった。その後1899年から、小西写真機店や浅沼写真機店、鶴淵幻燈店など写真や幻燈の取扱店が映画装置と映画の輸入販売を始める。つまり日本では1899年以降、映画が一般向け高級嗜好品として紹介されたことがわかる。

当時の興行は、映画の内容はもとより、装置そのものも見世物の対象だった。興行では説明者（のちの弁士）が装置の由来や仕組み、外国の文化などを紹介した。興行師は装置と一緒に都市を転々とし、その上映場所は大阪の南地演舞場や新町演舞場、角座、朝日座、浪花座、弁天座、天満座、奈良の玉井座、京都の東向座、神戸の相生座、名古屋の新守座、音羽座、横浜の湊座、東京の歌

舞伎座や錦輝館、川上座、浅草座など大きな劇場や貸ホールだった。映画を専門に興行する劇場はまだなく、映画は演劇など様々な舞台興行の穴埋めや舞台演目の一つとして上映された。

日本人が映画撮影を試みるのも、やはり1899年頃である²⁾。最初に使われた撮影機はフランス、ゴーモン社製で、東京の小西写真機店が1897年にイギリスの商社から売り物として購入したものだ。が、買い手が見つからず、しかたなく店員の浅野四郎らが客の注文に応じて撮り始めたと言う³⁾。例えば1899年に浅野は興行師・駒田好洋の依頼で『鶴亀』や『道成寺』など人気芸妓の舞踊を興行用に撮影している。同じ年、東京歌舞伎座で興行された「日本率先活動大写真」が上映したのも浅野ら撮影技師が客の依頼で撮った映画だった。吉澤商店の依頼で映画を撮影する柴田常吉もそうした撮影技師のひとりである。

柴田常吉は小西写真機店の常連客だったが、好きがこうじて花柳界などの注文で映画を撮影し始め、のちに銀座三越写真部の社員になった人物である。1899年に駒田好洋の依頼で新聞ネタの劇映画『稲妻強盗』や歌舞伎座の依頼で九代目市川団十郎と五代目尾上菊五郎の歌舞伎映画『紅葉狩』などを撮り、1900年には吉澤商店の依頼で中国に渡って義和団の乱を撮影した。こうした話題性の高い事件や人気芸妓、一流役者を題材にした映画は人々の注目を装置から映画の内容に向かわせ、それが映画を新奇な見世物から大衆的なメディアへ変えていったと考えられる。

ほかにも、この頃活躍した撮影技師のひとりに土屋常二がいる。土屋は映画渡来時の輸入者のひとり新居商会の新居三郎らに連れられて1893年に渡米、シカゴ万国博覧会で展示する日本茶屋を建てたあと、映画の撮影技術を習得する。帰国後は新居の東京貿易商会の世話になり、両国回向院の大相撲や初代中村雁治郎の歌舞伎『鳩の浮巢』（1900年）などを撮影した。撮影機はアメリカ、ルービン社製だった。

写真機店などの撮影技師が顧客の依頼で映画を撮るこうした慣例は、1900年代を通じて行われていたと考えられる。そのことは1909年に鶴淵幻燈店の技師らが浅草富士館の依頼で市村座の舞台を撮影した『佐倉宗五郎一代記』（1909年）

などを作ることからも推察できる⁴⁾。

しかし、そうした慣例と並行して、映画製作の機構も少しずつ整えられていく。その先駆者が吉澤商店である。1903年吉澤は、写真機店の技師に撮影を依頼する代わりに、ゴーモン製の撮影機を購入し、『明如上人葬儀実況』『小松宮彰仁親王御葬儀実況』『大阪勧業博覧会実況』『京都祇園祭実況』などの時事映画を製作する⁵⁾。映画は東京神田の錦輝館など貸ホールや吉澤の直営館あるいは契約館で上映された。こうして吉澤は映画の製作、配給、興行の三部門で事業を展開する日本で最初の企業となる。

1900年代末頃、映画の定期製作体制を整えるべく撮影所が次々と設立されるが、その嚆矢となるのも吉澤である。1908年、吉澤は東京目黒行人坂に撮影所を開所する⁶⁾。吉澤に続いては1909年、シンガポールから帰国した梅屋庄吉の経営する映画興行会社Mパター商会（1906年設立）が撮影所を東京新宿の大久保に開く。さらに1910年、横田永之助の起業した映画興行会社横田商会（1903年設立）も京都二条城に撮影所を開設する。前者は中村歌扇の主演で『曾我兄弟狩場の曙』（1908年）など、後者は牧野省三の演出、尾上松之助の主演で『碁盤忠信源氏礎』（1909年）など大衆に人気の舞台や新聞小説、講談などを映画化した。こうした国産映画は外国映画を好む客層とは異なる新たな客層——労働者や中下層階級——を開拓していく。ほかにも福宝堂や東洋商会、小松商会などが映画製作を組織的に展開し、日本の映画製作本数は一気に増加する。

吉澤商店	東京・目黒行人坂撮影所（1908年開所）
Mパター商会	東京・新宿大久保撮影所（1909年）
横田商会	京都・二条城撮影所（1910年）→法華堂撮影所（1912年）
福宝堂	東京・日暮里花見寺撮影所（1910年）
東洋商会	大阪・玉造
小松商会	東京・高田馬場

映画渡来から約16年目となる1912年、日本映画産業の構造は大きく転換する。草創期から業界を牽引してきた吉澤、Mパター、横田、福宝堂の大手4社が買収され、資本金1千万円の日本活動写真株式会社（日活）が設立されるので

ある。日活は、スタッフや資本など問題含みとはいえ、株式による資金調達を行った日本で最初の映画会社となる。そしてこの日本最大のトラスト会社は、福宝堂の造反者が日活に対抗し天然色活動写真株式会社(天活、資本金55万円)を創設する1914年以降も、圧倒的な力で日本とその植民地の市場を支配し続ける。その優位性は、1920年代初頭に松竹、大活、帝キネ、そして東亜やマキノといった新会社が乱立したあとも維持され、サウンド化で産業構造が再び大転換し始める1920年代末まで続く。

日本映画興行の発展と吉澤商店

草創期の映画興行は大きく三つの形態に分けられる。行く先々で劇場や貸ホールなどを借りて興行する巡回興行、同じ場所で映画を入替えて興行する常設興行、そして博覧会など特別なイベントでの興行である。世界の多くの国と同じく、日本の映画興行は巡回興行から始まる。とくにアジアは映画の主要生産地から遠い地理的条件に加え、経済格差や事業資本の乏しさなどから、興行に必要な量の映画を確保できない興行者が多かった。したがって同じ場所で興行し続けることができず、場所をかえながら興行せざるをえなかったのである。

アジアへの移民ブームの影響もあり、日本人は日本国内だけでなく、アジア各地でも映画を巡業した。例えば大島猪市は1900年に福州で興行し、そのあと厦門の日本領事館や軍艦、外国人向けのホテルで映画を上映したり興行したりする⁷⁾。映画はまた外交手段としても利用された。1900年、日本の工業教育に尽力した手島精一とその妻は福州日本領事館の親善パーティーで映画の上映会を催したと言う⁸⁾。ほかにも台湾や朝鮮、香港、上海、タイ、シンガポールなどで日本人の興行が確認されている。

1900年代の初頭までに巡回興行者が同じ場所で行う興行の日数はしだいに長くなる。1890年代は1～3日だったのが、数日や数週間となり、やがて常設館が誕生する。常設館での興行は、同じ場所での興行を成り立たせるため、より多くの映画を必要とすることから、常設館の誕生とその増加は、それだけ多くの映画が市場に出回るようになったことを意味する。

日本で最初の映画常設館は1903年10月1日に吉澤商店が開場する東京浅草の電気館である⁹⁾。もともとX線などの見世物を興行していたが、映画の常設館として改装再開場された。アジアでは1903年の時点で常設館が開場するのはかなり早い。例えばイギリスの植民地で東西貿易の中継点だったシンガポールは1906年頃、同じくイギリスの植民地だった香港は1907年、複数の国の租界があった上海は1908年、アメリカの植民地だったマニラは1909年である¹⁰⁾。またアジアの映画常設館の多くはまず外国人居住者の多い地域で開場したのに対し、日本はそれと無関係に開場する点でも異なっていた。

とはいえ日本もまたアジア映画市場の変容から自由だったわけではない。日本でも映画館の開場ラッシュは1907年に始まるからだ。1907年7月、全国で二番目の常設館が大阪千日前に開場したのを皮切りに、東京や大阪、京都、名古屋、博多、熊本などの大都市で常設館が次々と開場する。つまり1903年の常設館開場は吉澤商店が欧米の見よう見まねで早々と開場したものの、そのあとが続かず、結局、日本の開場ラッシュはアジアの他の大都市とほぼ同じ頃に起きていたのである。

こうした現象は、市場に出回る映画供給量の増加が深く関係する。例えば日本の場合、映画製作は1899年に始まり、1908年頃からその機構が整いだすため、常設館の増加はそうした国産映画の増加と結びつけて考えられてきた。だが実際は国産映画よりむしろ輸入映画の増加が興行を支えていたのである。そのことは当時の常設館の多くが外国映画を目玉に日本映画との混成興行を行っていたことから推察できる¹¹⁾。また、草創期の映画興行の中核をなす吉澤商店も、浅草の電気館やオペラ館、三友館、美音館、新声館、帝国館、横浜の電気館、神戸の万国館や栄館、大阪の第一世界館や第二世界館などに、欧米映画を数多く供給していた。つまり日本の映画常設館の急増は市場に出回る欧米映画の増加と深く関係すると考えられるのである。

では、なぜ欧米映画の供給量は急増するのか。なぜ日本と同じ現象がアジアの複数の都市でほぼ同時に起こるのか。それを理解するには日本市場を変動するアジアの映画流通ネットワークのなかで捉え直す必要がある。

アジアの映画流通と吉澤商店

映画産業草創期、日本での外国映画の供給者は大きく三つに分類される。小西写真機店や浅沼写真機店、鶴淵幻燈店¹²⁾など映画装置の輸入販売事業者、吉澤商店やMパター商会、横田商会、福宝堂、小松商会など映画の製作、配給、興行に従事する映画事業者、そしてネーロッパ日本貿易商会（Ed. L. van Nierop & Co.）やウゴ・マズリ商会（Ugo Masulli & Co.）、ジャパン・プレス・エージェンシー社（Japan Press Agency、頼母木桂吉経営）など映画や生フィルム¹³⁾の輸入事業者である。このうち最も多く外国映画を輸入し、市場の規模拡大に貢献したのは、言うまでもなく映画事業者である。映画事業者のなかには自分で輸入せず輸入業者に依頼するものもいたが、自ら積極的に映画を輸入するものもいた。吉澤は後者である。

どの事業者であれ、外国から映画を調達する方法は次の三つのうちどれかであった。一つは欧米の映画製作者から直接調達する方法である。当時の主な製作者はフランスのパテ社やイタリアのチネス社、デンマークのノルディスク社、イギリスのアーバン社、アメリカのエジソン社やルービン社などである。映画は高い定価で取引されるため、資金力の乏しい日本の事業者にはあまり縁のない方法だった。二つ目はロンドンの映画取扱店から調達する方法である。当時ロンドン是世界映画取引の中心地で、欧米の映画製作者やその代理店、仲介業者、レンタル業者、中古販売業者、機材販売業者など様々な映画関係の会社が集まっていた。三つ目は欧米の映画製作者やその代理業者などがアジアに開業した店から調達する方法である。例えばフランスのパテ社は1906年シンガポールに代理人を送り翌年には代理店を開業、その後、香港（1907年）、上海（1908年）、マニラ（1909年）に拠点を広げ、大量の映画をアジアに供給していた。

こうしたパテ社の進出はアジアの映画流通に革命をもたらす。パテ社は当時、世界最大級の映画製作会社であり供給会社であった。自社の映画以外にもエジソン社など様々な会社の映画を世界各地に供給していた。映画は販売かレンタルで取引され、価格は興行価値と関係なくフィルムの物理的な長さで決められた。新品に比べ中古は格段に安く、古ければ古いほど割安だった¹³⁾。映画の主

要生産地である欧米から遠く離れ、輸送に日数のかかるアジアでは、レンタルは割高なため、古い中古映画を購入する事業者が多かったが、パテ社の進出によりレンタルも彼らの選択肢の一つとなる。結果、レンタルや中古など市場に出回る映画の量は一気に増え、それがアジア各地に常設館の開場ラッシュを引き起こしたと考えられる。日本でもMパター商会の梅屋庄吉のように、アジア市場からパテ社の映画を入手していたものも少なくなかった¹⁴⁾。

アジア市場で欧米映画の供給量が急増した要因はほかにもある。映画の買付け方法の変化である。草創期の買付けは主にカタログを使っていた。欧米の映画製作者やその代理店などからカタログを取り寄せ、必要な映画を注文し、料金を払い、郵送でフィルムを受け取るのだ。ところが、映画常設館が次々開場する頃から海外に拠点を設け、現地で映画を大量かつ継続的に買付けるようになる。日本では吉澤商店が最初にロンドンに進出、そのあと福宝堂が続いた。

日本の映画会社が最初の海外拠点を、フランスなど主要映画生産国でもシンガポールなどアジアの貿易拠点でもなくロンドンに設けたのは、日英通商航海条約（1894年）や日英同盟（1902年）など政治的、軍事的、経済的な日英の友好関係よりも、そこが世界映画取引の中心地だったからである。イギリスは早くから海運業が発達し、映画はもちろん様々な物資が世界各地の生産国からロンドンに集められ、そこから船で世界の主要な港に運ばれていた。とくにアジアなど欧州から遠く離れた地域への運搬は高いシェアを誇っていた¹⁵⁾。吉澤が映画の買付け担当者をロンドンに派遣したのはそれゆえである。

以上、日本映画産業の基盤が形成される過程を、国境を越える交渉のネットワークのなかで捉え直し、その文脈に吉澤商店を位置づけた。吉澤が産業基盤の形成に先駆的、中核的な役割を担い、早くから世界とつながっていたことがわかる。そこで以下ではロンドンにおける吉澤商店の足跡をたどり、日英映画交渉の歴史の一端を明らかにする。それによって産業基盤の形成発展は、国内に起こった事象だけで説明しうるものではなく、日本と日本を取り巻く環境——アジアそして世界の市場——との関係も視野に入れて紐解く必要があることを示したい。

2 日本映画産業形成期の日英交渉——吉澤商店を事例として

日本映画産業の基盤形成を牽引した吉澤商店がロンドンから大量の映画を輸入していたのであれば、日英交渉が果たした役割は無視できないものとなる。しかし従来の日本映画史研究では、吉澤ロンドン支店の存在は知られているものの、具体的にどんな活動を展開していたかまでは明らかにされてこなかった。現在に残された最も詳しい記録は田中純一郎の次の文章である。

輸入フィルムの買付けは、ロンドン市ケンブリッジ街九八に支店を設け、最初は河浦さんの甥の立島清氏が、英国留学生を兼ねて、選定、買入れを行い、その後は河浦さんの女婿^(く)栗本瀬兵衛氏(学士院会員鋤雲の息子)が、これに当たった¹⁶⁾。

この記録から、吉澤商店がロンドンのケンブリッジ街98番地に支店をもっていたこと、現地での映画の買付けは吉澤商店経営者・河浦謙一の甥の立島清が行い、のちに河浦の娘の夫・栗本瀬兵衛に交替したことが理解できる（後年、田中は立島を河浦の「弟」と書き改める¹⁷⁾）。しかし河浦や立島、栗本がそれぞれどのような役割を果たし、立島と栗本がいつ渡英したのかなど詳細な事情は一切不明である。

近年、入江良郎の研究により、吉澤商店と河浦謙一の活動がより明確にされた。河浦は富山県津沢町の光西寺住職・立島順誓（のちの魚津町照善寺住職・轡田順誓）の息子で、幼い頃に魚津町に移り河浦謙一と改姓し、富山から大阪に出て私塾の泊園書院で藤澤南岳に漢学、東雲学校で英語を学んだあと、東京の吉澤商舗に就職し吉澤の養子になると言う（ただし姓は河浦のまま¹⁸⁾）。吉澤商舗は1879年神田区紺屋町5番地に創業された貿易商で、創業時は錦絵や浮世絵、蒔絵、古郵便切手などの売買や輸出を行っていた。1895年、新しい店舗を新橋区南金六町13番地に開設、1896年9月までに吉澤商舗を吉澤商店に、業務提携していた丸川商店(京橋区南伝馬町2-11番地)を吉澤商店幻燈部に改め、

1897年から外国製映写機の販売を始める¹⁹⁾。しかし、この詳細な研究もその対象は日本での吉澤の活動であり、ロンドンでの事業は明らかにしていない。

そこで以下では、国内外に残されたわずかな史料を寄せ集めることで、ロンドンでの吉澤商店の活動を浮かびあがらせる。具体的には吉澤商店の河浦謙一、立島清、そして栗本瀬兵衛の足跡をたどり、それによって日本映画産業の形成発展に寄与した日英交渉史の一端を捉えたい。

河浦謙一

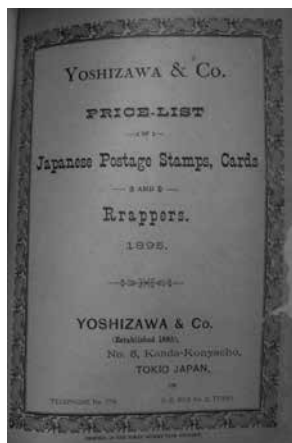
田中純一郎の記述から、ロンドンでの吉澤商店の活動は立島と関係が深いと推察されるため、河浦の活動はまだ十分に調査していない。ただ興味深い史料を一点紹介する。ロンドンの大英図書館に保管されている吉澤商店(Yoshizawa & Co.)の英語カタログである。このカタログは吉澤商店が海外でどのように事業を展開していたかを知る手がかりとなる。以下にその表紙を転記する。

日英映画交渉史——吉澤商店を事例として（笹川）

YOSHIZAWA & Co.
PRICE-LIST
——< OF >——
Japanese Postage Stamps, Cards
——✿ AND ✿——
 _マ _マ
 Rrappers.
 1895.

YOSHIZAWA & Co.
(Established 1885) .
No. 5, Kanda-Konyacho,
TOKIO JAPAN,
OR
TELEPHONE No. 774. P.O.BOX No. 2, TOKIO.

PRINTED AT THE TOKYO TSUKIJI TYPE FOUNDRY.²⁰⁾



カタログの内容は、吉澤商店が販売する古い日本の郵便切手や封筒、包装紙、葉書、貨幣のリストである。発行年や値段、色などが細かく記載されている。巻末には浮世絵や錦絵、絵本、写真、絵画、美術品などの販売広告もある。カタログの表紙に吉澤の設立年は1885年と印刷されている。これは入江の主張する吉澤商舗の設立年（1879年）とも吉澤商舗を吉澤商店に改称する年（1895年から1896年9月までの間）とも食い違う。

大英図書館に所蔵されているとはいえ、このカタログは築地で印刷されていることから、ロンドンでの吉澤の活動を直接示すものではない。日本からロンドンの誰かが取り寄せたのかもしれないし、人を介してたまたまロンドンにたどり着いただけなのかもしれない。だが、入江の推察するように、河浦が1893年頃から吉澤の海外事業に新たな展開をもたらしたのであれば、このカタログは吉澤が1885年に海外輸出事業をYoshizawa & Co.の名で開始し、1895年にはロンドンで積極的に商売を展開していた痕跡とみなすことは不可能ではない。

立島清

立島清は吉澤商店がロンドンに派遣した最初の社員である。田中純一郎は「河浦の弟立島清が苦学の目的をもってロンドンに留学していたので、この立島を通して新映画の購入を行」ったと述べる²¹⁾。ロンドンから送られた映画は神田錦輝館で「西米戦争大活動写真」と銘打って1899年6月1日から興行されたと言う。田中はまた、立島が日露戦争中に日本に滞在していたとも述べている。

新橋際の吉澤本店にあったラボには、専ら幻灯スライドの製作技師だった大沢吉之丞と千葉吉蔵が中心となり、これに小西亮、村上満磨が加わり、徒弟として枝正義郎がいた。欠員になった藤原の代わりには、河浦の弟で、後にロンドンへ留学し、ロンドンの映画市場で吉沢のために外国映画の買付けをした立島清も、少しの間、撮影に関係した²²⁾。

「新橋際」は南金大町をさす。「大沢吉之丞」は吉澤の撮影技師で1904年に河浦謙一と渡米し技術を習得した人物である。またここで言う「藤原」とは日露戦争を撮影するため中国に派遣された吉澤の撮影技師・藤原幸三郎をさす。田中の記述が正しければ、立島は少なくとも1899年頃と1904年以降の二度、渡英したことになる。

しかし、1899年から立島がロンドンで映画の買付けをしていたかどうかは検証の余地がある。田中が言うように「苦学」の青年が高額な映画の選択や交渉、手続きをひとりで何年も担当していたとは考え難いからだ。たとえ立島がロンドンに滞在していたとしても、彼が日本に送ったのは、映画ではなく映画のカタログと考えるほうが自然である。吉澤はそのカタログを使ってロンドンから映画を購入していたと考えられる。いずれにせよ、田中の言うケンブリッジ街98番地の吉澤ロンドン支店が1899年に開設されたとは考えられない。

ではいつ支店は開設されるのか。いつ立島は渡英し、支店を開くのか。日本に残された吉澤のカタログや広告をたどると、その開設時期がおぼろげに見える。まず1907年11月に吉澤商店が発行した『活動写真器械同フィルム（連続写真）定価表』にロンドン支店の記載はない²³⁾。ところが、1908年すなわち明治「四十一年八月夏季売出し」のために発行した『仏国パテー会社製・英国アルバン会社製・其他諸会社製 活動写真フィルム正価表』には「英国ロンドン市ケンブリッジ街九八番 吉澤倫敦出張所」と記載されている²⁴⁾。そして1909年6月25日に創刊された映画雑誌『活動写真界』の吉澤商店初出広告には「英国倫敦ケンブリッジ街九八 倫敦支店」との記載がある²⁵⁾。これらの史料に表記の揺れがないことを前提とするならば、吉澤商店は1908年8月までにロンドンに「出張所」を開き、1909年6月までにそれを「支店」に格上げしたと仮定できる。

吉澤ロンドン出張所が1908年8月までに設立されたと考える根拠はほかにもある。その一つが立島清の渡英記録である。外務省の『自明治四十年十月至同年十二月 外国旅券下付表 東京府』によれば立島の旅券は1907年12月10日に下付されている。

旅券番号	一一〇六〇二
氏名	立島清
族称	平民
身分	現順養子
本籍地	富山県西礪波郡津沢町大字西島村
生年月日	明治十五年八月十四日
旅行地名	英国
旅行目的	商業視察
下付月日	十二月十日 ²⁶⁾

この記録から立島清は1882年8月14日に富山県西礪波郡津沢町大字西島村で生まれ、父の立島現順は養父だったことがわかる（実父は、入江が明らかにしたように、津沢町から魚津町に移り改名した轡田順誓）。兄の河浦謙一が1868年2月15日生まれだから、立島は14歳年下である。旅券の渡航先はイギリス、目的は商業視察、身分は平民。渡英時は25歳の独身で、任務遂行に十分な年齢と言える。

立島がいつイギリス行きの船に乗ったかは不明である。だが、1907年12月10日に旅券が下付されていることから12月中旬以降と考えられる。日本からイギリスまでは船で約7週間を要したので、すぐに出発したとしてもロンドン到着は1908年2月頃となる。その頃日本では映画館の開場ラッシュが起っていたことから、立島の渡英目的は単なる商業視察ではなく、吉澤の安定的な映画供給を可能にするため外国映画の買付け拠点として「吉澤倫敦出張所」を開設することだったと考えられる。

立島が1908年にイギリスに到着したのであれば、いつまでそこに滞在したのだろうか。これに関してはイギリスの乗船記録に立島の名前が残っている。彼は1911年8月9日にイギリス南部のサウサンプトン港からホワイト・スター・ライン社のオリンピック号でニューヨークに向かっていた²⁷⁾。ホワイト・スター・ライン社は豪華客船タイタニック号を所有していた海運会社である。明治

期の旅券は渡航の目的地ごとに発行されていたので、このとき立島がイギリスを出てニューヨークに向うのは、彼が帰国の途についたことを意味する。したがって立島は、1908年2月頃ロンドンに到着し、1911年8月9日にイギリスからニューヨークに向かい、アメリカ経由で日本に帰国したことがわかる。

この裏付けとなる記録が1911年9月24日付『読売新聞』に残されていた。「世界の活動写真——吉澤商店倫敦支店長の談」と題した記事に次のようにある。

吉澤商店の倫敦支店長として活動写真の視察及其研究を兼ねて前後四年間欧州に滞在し其帰途米国を経廿三日横浜入港の天津丸にて帰朝した立島清氏に就て其土産話を聞く²⁸⁾。

この記事から立島は太平洋を横断し1911年9月23日に横浜港に到着したことがわかる。つまり立島は1908年2月頃から約3年半強イギリスに滞在していたのである。

ではそのあいだ立島はイギリスで何をしていたのだろうか。立島はイギリスから帰国したあと、1911年11月25日号の『活動写真界』に寄稿し、ロンドン事情について語っている²⁹⁾。しかし、彼は吉澤ロンドン支店の活動については何も述べていない。立島はイギリスで何をしていたのか。

まずイギリスでの立島の足跡を明らかにすべく、吉澤ロンドン出張所のあったケンブリッジ街98番地を検証する。ケンブリッジ街98番地はピムリコ(Pimlico)と呼ばれる地区にある³⁰⁾。ピムリコはヴィクトリア駅の南に位置するテムズ川近くの低湿地帯で、1820年代からトマス・キュービット(Thomas Cubitt)が宅地開発を進めた閑静な住宅街である。1908年頃のロンドン市街地図を調べると、ケンブリッジ街に大きなビルはなく、一軒家と思われる敷地が均等に区画されている。その98番地は小ぶりの一軒家で、所有者はジョージ・ニュー(George New)とある。おそらく立島はニュー氏から部屋を借り下宿兼オフィスとして使っていたと考えられる(もし仮に彼が1899年にロンドンに留学したのであれば、そのとき借りた下宿の可能性もある)。したがって吉澤

商店がロンドン出張所（支店）と呼んでいたのは、ビジネス街でも商業街でもなく、住宅街にある立島の下宿兼オフィスで、彼はそこから映画会社のあるビジネス街に通っていたと考えられる。

1909年5月8日付『ブライトン・ガゼット』*Brighton Gazette* に立島の名前が掲載されている³¹⁾。ブライトンはイギリス南部の観光保養地である。その高級ホテルに立島は宿泊していた。滞在の目的は不明だが、吉澤商店がブライトンに新しい拠点を設けようとしていたとは考え難い。日本からの来賓を案内して遊びに行った可能性が高い。あるいはブライトンの映画会社と交渉するために訪れたとも考えられる。いずれにせよ、20代の日本人の若者が有名保養地の高級ホテルに宿泊した事実は、このときすでに立島が立派に海外事業の責務を果たしていたことを物語る。

実際、ロンドンでの吉澤商店の事業規模はその頃大きく飛躍する。吉澤が広告の「倫敦出張所」を「倫敦支店」に改めるのも同じ頃である。飛躍のきっかけは1910年5月14日から10月29日までロンドンのシェパーズ・ブッシュで開催された日英博覧会（Japan-British Exhibition）だったと考えられる。

この博覧会は日本政府と興行師イムレ・キラルフィの経営する博覧会会社が、「日英両締盟国間に存在する和親関係を一層牢固たらしむる目的を第一として」共催した³²⁾。日本政府は1909年3月31日に契約書に調印し、4月6日に日英博覧会事務局官制を公布、農商務大臣・男爵大浦兼武を総裁に任命する。博覧会で政府は日本の伝統と文明の両方を西欧諸国にアピールしようと、織物などの工業品や美術品、庭園などを展示する一方、演芸や実演販売の「余興」にも力を入れ、日本の家屋や茶店、田園風景の模型、アイヌ村落、台湾原住民村落、演芸、映画などを用意した³³⁾。余興の運営はキラルフィの博覧会会社が行い、日本側との交渉は国際的に活躍していた興行師・櫛引弓人（元・新居商会）がその任に当たった。政府は総額208万円もの大金をこの博覧会につき込み、日本から芸人や職人など235名、台湾から「生蕃」24名と「警部巡查」1名をイギリスに送る³⁴⁾。

日本政府はアイヌや台湾、朝鮮を展示することで西欧諸国に帝国日本のイメ

ージを示そうとするが、日本もまた西洋人の興味本位なまなごしの対象であることにかわりなかった。博覧会を見学した長谷川如是閑は「日本に関する余興の興行物は一つとして日本の迷惑ならざるは無く」「怪しげの日本婦人に怪しげの服装」などどれも「冷汗」ものである³⁵⁾。博覧会の当事者は日本の「小さい美しい点」を強調し、そのせいで「日本を小さく美しい国と思ふ見解が愈増長の傾きあるは少々癪に障る」と批判する。長谷川は博覧会が日本を西欧社会の抱く日本のイメージにすり寄って展示しようとしていることに我慢がならなかったのである。

しかし吉澤商会にとってこの博覧会は大きな転機となる。吉澤は日本の紹介映画を製作し会場で公開する機会を得る。目黒の行人坂撮影所で西洋人が日本料理を食し芸者と踊り羽根つきを興じる様子やアイヌの熊祭り、旧劇や新派劇の演目などを撮影し、展覧会の余興として上映したのである³⁶⁾。

また、博覧会の会場でも吉澤は映画を製作した。博覧会の実況を報じる映画である。映画は会場内の展示館で上映された。映画のシークエンスは以下の通りである。

- 1 博覧会場正門前の入場者
- 2 日本歴史館、日本織物館、英国織物館、歴史写真館、公会堂、大瀑布
- 3 日本庭園（第1号）
- 4 日本庭園の雑踏
- 5 日本政府館、帝国塔、東洋館、昇降観覧機
- 6 美術館、27号館、28号館、公会堂、工業館、料理店、日本天産館、休憩堂
- 7 園芸倶楽部、音楽堂と日本音楽隊
- 8 台湾喫茶店と給仕女
- 9 サイクロン
- 10 カナダ観光鉄道
- 11 昇降観覧機から見た博覧会場の南半分の全景

- 12 動搖盃
- 13 日本余興館
- 14 日本村の一部
- 15 日本庭園（第2号）
- 16 単軌鉄道³⁷⁾

撮影者は不明だが、製作者は吉澤商店ロンドン支店であることから、支店長の立島清がその製作に奔走したことは疑いようがない。

しかし、吉澤にとって日英博覧会最大のビジネス・チャンスは映画とは別のところにあったようだ。そのことを示唆する吉澤商店の広告が『活動写真界』1910年6月25日号に掲載されている。

本年五月より英国「ロンドン」市に於て開設の日英博覧会には全世界より多数の參觀者集るを以て弊店にては「ロンドン」市は従来支店の設置あるを以て此際大に奮勵致し最も高価に販売致し候に付当分の中上等物は従来の買入直段の殆んど二倍の高価に買入申候間此の無二の好機会を逸することなく廢物に均しき古錦絵を以て外国の金に代へらるれば国家の純利益になるを以て筐底を御尋ねの上御持參被下度³⁸⁾

吉澤は日本の映画雑誌に、「古錦絵」の買取りを呼びかける広告を掲載しているのである。その文面から博覧会での錦絵の需要がいかに高かったか、吉澤がその販売にいかにか力をそそいでいたかがわかる。長谷川如是閑が指摘したように、日英博覧会が西欧人の眼に迎合した日本のイメージを売る場だったとすれば、吉澤にとってそれは古美術を販売する絶好の機会だったのである。

この日英博覧会のあと、吉澤商店はロンドンの活動拠点をピムリコ地区ケンブリッジ街98番地からウェストminster地区ヴィクトリア街32番地に移す。ロンドンの電話帳に「Yoshizawa & Co. cinematograph film makers, 32 Victoria street SW」の記載があらわれるのは1912年版からである。よって支

店を移すのは1911年すなわち日英博覧会の翌年だったと考えられる。閑静な住宅街のケンブリッジ街と異なり、ヴィクトリア街はバッキンガム宮殿やウェストminster寺院、国会議事堂に近い、日本でいえば丸の内のような一流ビジネス街である。その32番地は「ヴィクトリア・マンション」という名の大きなビルで、鉄鋼やニッケル、電気、土木などのインフラ企業がオフィスを構えていた。よってこの移転は、吉澤の海外事業が日英博覧会を機に大きく発展したことを示す。

それにしても、なぜ吉澤はヴィクトリア街を選んだのか。なぜ映画関係ではなく、お堅い大企業の集まるビジネス街に移ったのか。移したのは立島か、それとも立島の後任者か。この疑問を解き明かすには、河浦謙一の長女しづへの夫・栗本瀬兵衛について知る必要がある³⁹⁾。

栗本瀬兵衛

栗本瀬兵衛は幕末の幕臣・栗本鋤雲の晩年の子である⁴⁰⁾。鋤雲は幕府内班侍医を務めたことのある医師だが、フランス語が堪能だったことから奉行所詰となり、横須賀造船所建設などに携わったのち、1867年に徳川幕府の使節団とフランス官民の調停役としてパリに派遣される。しかしパリ滞在中に幕府が瓦解したため帰国、東京の新聞社に勤め、その後、東京の本所区に隠居する。

瀬兵衛は1883年5月に生まれた。幼い頃は鋤雲に漢文を習っていた詩人の島崎藤村とも交流があった。14歳で父を亡くし、兄の秀二郎に養われる。秀二郎は1860年6月11日生まれ、1886年に鋤雲の養子となり、医学を学んで得精研堂病院を設立する人物である⁴¹⁾。記録によれば、瀬兵衛は1910年に東京帝国大学政治学科を卒業したあと、吉澤商店に入社、ロンドン支店に赴任する⁴²⁾。1915年には帰国し独立、輸入業を営むが、1923年の関東大震災を機に教育の道に転じている。

外務省に保管された『自明治四十四年五月一日至明治四十四年五月卅一日 外国旅券下付表 東京府』によれば、栗本は1911年5月4日に渡英のための旅券を受け取っている。

旅券番号	一七五三五四
氏名	栗本瀬兵衛
身分	秀二郎養弟
本籍地	東京市本所区北二葉町四一
年齢	廿八年一ヶ月
保証人	——
旅行地名	英国
旅行目的	実業見学
下付月日	五月四日 ⁴³⁾

瀬兵衛の本籍地は父の鋤雲が亡くなるまで住んでいた「東京市本所区北二葉町四一」、渡英時の身分は「秀二郎養弟」とあることから、このときは、まだ吉澤商店の店主・河浦の娘とは結婚していない。したがって瀬兵衛は吉澤の一社員としてロンドン支店に赴任していたことがわかる。

旅券申請に記載された栗本の渡英目的は「実業見学」だが、具体的に彼はどのような使命を帯びてロンドンに向かったのだろうか。栗本の渡英目的に言及した記事は二つある。ひとつは1911年5月25日付『読売新聞』である。

故栗本鋤雲氏の末男法学士栗本瀬兵衛氏は今回吉澤商店の用務を帯び演劇活動写真及び通俗文芸研究の爲め近日倫敦へ向け出発する由⁴⁴⁾。

この記事から、栗本は1911年5月25日の数日後にイギリス行きの船に乗り、ロンドンで映画や演劇、文芸を調査研究し、吉澤の映画事業に役立てようとしていたことがわかる。日本からロンドンまではまっすぐ向かったとして約7週間の船旅である。栗本が途中どこかに立ち寄った可能性もあるが、1911年8月9日に前任者の立島が帰国の途につくことから、あまり寄り道せず、遅くとも7月下旬にはロンドンに到着していたと考えられる。

もう一つの記事は『活動写真界』の1911年6月1日号である。『読売新聞』

と少し違う渡英の目的が報じられている。

吉澤商店に於ては、従来のロンドン支店の業務をして益々拡張せしめんと
の意志なるが、それに就いて法学士栗本瀬兵衛氏は悉皆の要務を帯び、
這般倫敦に向け出發せられたり⁴⁵⁾。

この記事から、法学士の栗本瀬兵衛の派遣は、吉澤商店ロンドン支店の業務拡
張が関係していたことがわかる。残念ながら、記事にその業務内容は書かれて
ない。

幸運にも、イギリスに興味深い記事が残されていた。映画業界誌『ビオスコ
ープ』*Bioscope* 1911年10月26日号掲載の「日本での映画の発展」である。吉
澤商店に関する記事であることから、執筆者の「S. KURIMOTO」は栗本瀬兵
衛に間違いない。記事のなかで栗本は立島について次のように述べている。

In 1908 Messrs. Yoshizawa sent a representative to London, in the
person of Mr. K. Tateshima, who founded a branch of the firm at 32,
Victoria Street, S. W.. He remained in London until quite recently,
when he succeeded by Mr. S. Kurimoto. Mr. Tateshima was the first
Japanese gentleman to come to this country for the express purpose
of exporting the films, projectors, accessories, etc.⁴⁶⁾

この記述から、吉澤ロンドン支店をヴィクトリア街に移転したのは立島であり、
栗本がそれを引き継いだことがわかる。移転者が立島であることは、それが日
英博覧会事業の成果のひとつだったことを示唆する。つまり立島は、日英博覧
会で築いた貴重な人脈と商売の手ごたえをもとに、ロンドンでの古美術販売と
映画事業を拡大発展すべく、西欧の取引相手の信頼をえる目的で支店を官庁や
一流企業の集まるビジネス街にオフィスを移したと考えられるのである。

興味深いのはロンドンでの立島が古美術販売と映画の買付けだけでなく、映

画や映写機、付属部品の輸出にも挑んでいた点である。法学士・栗本瀬兵衛はその「拡張」された事業を軌道に乗せるために派遣されていたと考えられる。

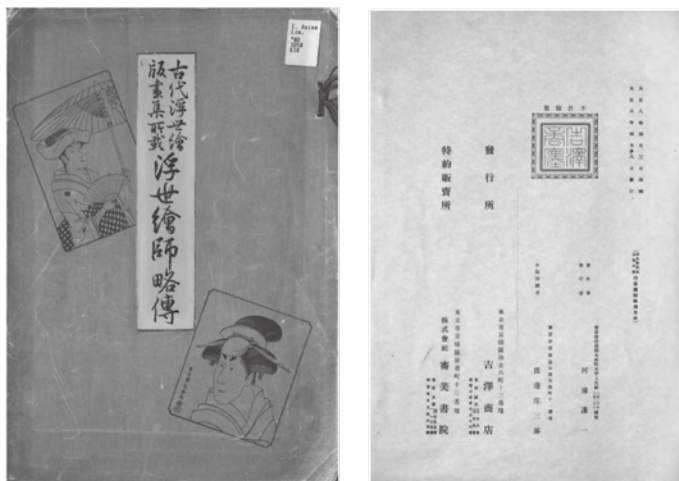
3 日本映画産業の近代化と日英交渉

海外での吉澤商店のこうした野心的な事業展開は1912年、吉澤が大日本フィルム機械製造株式会社の買収に応じることで途絶えてしまう。大日本フィルム機械製造株式会社はアメリカのモーション・ピクチャー・パテント・カンパニー（MPPC、1908年成立）を意識し、日本にも大資本の映画専門会社を作る目的で設立されたトラスト会社である⁴⁷⁾。1912年1月5日、創立委員会が公爵桂太郎の実弟・桂二郎の邸宅で開かれ、委員長に三菱財閥岩崎久弥の甥で貴族院議員の伯爵後藤猛太郎が選出される。同社はMパター商会、吉澤商店、横田商会、福宝堂の順で大手映画会社4社を買収し、1912年9月10日に創立総会を開催した。創立時の取締役社長は後藤猛太郎、専務取締役は元軍人の鈴木要三郎、取締役には台湾総督府・後藤新平の友人で神戸の海運業者・後藤勝造⁴⁸⁾、桂二郎、林謙吉郎、高倉藤平、そして4社の社長だった梅屋庄吉、河浦謙一、横田永之助、田畑健造が就任する⁴⁹⁾。社名は日本活動写真株式会社と改称され、ここに日活が誕生する。

産業構造を革新するこの大再編により、吉澤商店は映画事業から手を引き、美術工芸品や日用品などの貿易業に専念することになる⁵⁰⁾。1919年に吉澤商店が出版した『古代浮世絵版画集所載浮世絵師略伝』には、著作および発行者として河浦謙一の名前が記載されている。河浦の住所は「東京府荏原郡大崎町大字上大崎二百二十七 二百二十八番地」、吉澤商店の所在地は買収前と同じ「東京市京橋区南金六町十三番地」である。

一方、ヴィクトリア街の吉澤ロンドン支店を引き継いだ日活は、社員の小野丑蔵をロンドンに派遣する。

外国映画は吉澤商店のロンドン出張所をそのまま引き継ぎ、新たに小野丑蔵を派遣して購買にあたらせ、別に横浜の平尾商会を通じてヨーロッ



『古代浮世絵版画集所載浮世絵師略伝』の表紙と奥付

バ映画を購入した⁵¹⁾。

日活の社史には小野のロンドン派遣は1913年2月とある⁵²⁾。外務省の『自大正二年一月至大正二年三月 外国旅券下付表 東京府』によれば、小野の旅券は1913年2月6日に下付されていた⁵³⁾。したがって小野は4月から始まる新年度に間に合うようロンドンに向かったと考えられる。派遣時の小野の年齢は栗本瀬兵衛と同じ30歳である。栗本は吉澤が映画事業から手を引いたあともロンドンに留まり、1915年に帰国する。そのあいだ栗本がロンドンで何をしてたのかは不明である。帰国後、独立し輸入業を営むことから起業の準備をしていたのかもしれないし、小野に事業を引き継いでいたのかもしれない。いずれにせよ1913年以降、日本とイギリスの新たな交渉窓口は小野丑蔵となる。

ロンドン支店に赴任した小野はまず、支店をウェストミンスター地区のヴィクトリア街32番地から同地区のジェラード街13番地すなわちロンドン・チャイナタウン（倫敦華埠）に移す。ジェラード街にはアメリカ、エジソン社の試写室やユニヴァーサル社、イギリスのウォルタードウ社やタイラー社など装置の

製造販売、映画の製作販売、レンタル、輸出入、映画館の経営や興行など多くの映画関連会社が集まっていた。また、ジェラード街と交差するウォーダー街にはフランスのパテ社やイギリスのアーバン社など世界有数の映画供給網をもつ大映画会社のオフィスがあった。

日活がロンドン支店を大企業の集まる官庁街から映画関連会社の密集するジェラード街に移すのは、世界の映画流通ネットワークにより深くコミットしようとする日活の企業意思の表れとも読める。こうして日英映画交渉は、家族経営の貿易会社から、資本と技術を集めた映画専門の株式会社に引き継がれ、日本の映画産業を新たな段階へと導いていく。

以上、吉澤商店のロンドンでの活動をたどり、これまで顧みられることなかった日英映画交渉史の一端を紐解いてきた。吉澤は日本映画産業の礎を築く主要な会社のひとつである。その吉澤がいち早くロンドンに進出し、国家の助けをかりて日英映画交渉のルートを築いていた事実は、日本映画産業の形成発展に果たした日英交渉の役割の重要性を示す。日本企業のロンドンでの活動は今後さらに研究する必要があるが、少なくとも現時点で言えるのは、吉澤がロンドンから運んできた映画が、1907年以降の日本で急増する映画常設館の存続を可能にし、映画市場の規模を押し広げ、産業発展の重要な原動力になっていたということだ。100年以上前にアジアの片隅に誕生した微弱な産業は、世界の流通システムにどう挑み、どう自らを接続し、自国の産業を形成していったのか。日本映画産業の発展と日英交渉の関係を明らかにすることで、日本の映画産業が世界との様々な交渉の網目のなかでどう形づくられたのかが、より鮮明に見えてくるだろう。

注

- 1) 装置の輸入と最初期の製作興行に関しては田中純一郎『日本映画発達史』第1巻、中央公論社、1975年、28～66頁および塚田嘉信『日本映画史の研究——活動写真渡来前後の事情』現代書館、1980年、13～280頁を参照。
- 2) 日本人以外ではフランス、リュミエール社のコンスタン・ジレル（1897年）やガブリエル・ヴェール（1898年）、アメリカ、エジソン社のジェームズ・ホワイトやフレッド・ブ

レシンデン（1898年）などがいる。当時は装置の製造会社が購入者のために商品と一緒に技師を派遣することもあった。

- 3) 田中純一郎『日本映画発達史』第1巻，中央公論社，1975年，69～93頁。
- 4) 田中純一郎『日本映画発達史』第1巻，中央公論社，1975年，159頁。
- 5) 田中純一郎『日本映画発達史』第1巻，中央公論社，1975年，107～109頁。なお吉澤は1900年頃から外国製映写機の模倣品を製造販売する。顧客には苗栗の袁希洛など留学や旅行で日本を訪れた裕福な台湾人や中国人もいた。
- 6) 田中純一郎『日本映画発達史』第1巻，中央公論社，1975年，130～174頁。
- 7) 「厦門の活動写真」『台湾日日新報』1900年12月26日付，5面。
- 8) “Readings for the Week,” *North China Herald*, November 21, 1900, p. 1076. 手島精一は幻燈を教育に利用した最初の人と言われている。
- 9) 「浅草公園の活動写真」『読売新聞』1903年10月2日付，3面。
- 10) 笹川慶子『近代アジアの映画産業』青弓社，2018年，451～452，474～475，543～544頁。笹川慶子「初期アジア映画供給網の形成——香港を事例として」『関西大学文学論集』第68巻第1号，関西大学文学部，2018年，20～23頁。
- 11) 例えば浅草電気館はパテ社の『花売娘』を目玉に日本映画『水泳競漕会』などを上映，三友館もナイアガラの滝などの外国映画を売りに日本映画を併映していた（『読売新聞』1908年8月30日付，3面）。
- 12) 浅沼写真機店や鶴淵幻燈店は装置だけでなく日露戦争映画などを輸入し，横田永之助や小林喜三郎などの興行者に販売していた。
- 13) 例えば1回上映されたパテ社の中古映画は\$0.01USドル／メートル，3，4回上映された映画は\$0.005ドル／メートルだった（Nelson T. Johnson, “China,” *Daily Consular and Trade Reports*, Bureau of Foreign and Domestic Commerce, Department of Commerce, May 10, 1913, p. 728.）。
- 14) 梅屋庄吉に関しては『孫文・梅屋庄吉と長崎——受け継がれる交流の架け橋』長崎県文化観光物産局文化振興課ほか，2011年参照。梅屋はシンガポールからパテ映画を持って帰国，1905年6月に故郷の長崎で上映会を開いたあと，翌年7月4日から東京の新富座でカラー映画『耶穌キリストの一代記』などを興行し，興行会社Mパター活動写真会（Mパター商会）を立ち上げる（『読売新聞』1906年7月14日付，6面）。
- 15) 例えば1894年にスエズ運河を通過した船の74.6%はイギリス船だった（Edger Crammond, *The British Shipping Industry*, Constable and Company Limited, 1917, pp. 25-27.）。
- 16) 田中純一郎「連載 秘稿日本映画 第7回」『キネマ旬報』キネマ旬報社，1965年8月上旬号，42頁。
- 17) 例えば田中純一郎『日本映画発達史』第1巻，中央公論社，1975年，91頁。
- 18) 入江良郎「吉澤商店主・河浦謙一の足跡（1）——吉澤商店の誕生」『東京国立近代美術館研究紀要』第18号，東京国立近代美術館，2014年，32～63頁。

- 19) 入江良郎「吉澤商店主・河浦謙一の足跡(1)——吉澤商店の誕生」『東京国立近代美術館研究紀要』第18号, 東京国立近代美術館, 2014年, 62頁。吉澤商店広告『朝日新聞』1896年11月9日付, 7面。
- 20) Yoshizawa, *Price-list of Japanese Postage Stamps, Cards and Rrappers*, Yoshizawa, 1895, n.p.. 冊子は表紙抜きで14枚と折込1枚。
- 21) 田中純一郎『日本映画発達史』第1巻, 中央公論社, 1975年, 91頁。
- 22) 田中純一郎『日本教育映画発達史』蝸牛社, 1979年, 20頁。
- 23) 吉澤商店『活動写真器械同フィルム(連続写真)定価表』吉澤商店, 1907年。
- 24) 吉澤商店『仏国パテー会社製・英国アルバン会社製・其他諸会社製 活動写真フィルム 正価表』吉澤商店, c1908年。
- 25) 吉澤商店広告『活動写真界』日本活動社, 1909年6月25日号, 頁なし。
- 26) 外務省『自明治四十年十月至同年十二月 外国旅券下付表 東京府』
- 27) “Names and Descriptions of Alien Passengers,” *Outward Passenger Lists in the UK*, August 9, 1911, n.p..
- 28) 「世界の活動写真——吉澤商店倫敦支店長の談」『読売新聞』1911年9月24日付, 2面。
- 29) 立島清「活動所感」『活動写真界』日本活動社, 1911年11月25日号, 3頁。
- 30) Simon Bradley and Nikolaus Pevsner, *The Buildings of England London 6: Westminster*, Yale University Press, 2003, pp. 759-764.
- 31) “Hotels and Boarding Houses,” *Brighton Gazette, Hove Post, Sussex & Surrey Telegraph*, May 8, 1909, p. 7.
- 32) 「日英博覧会」『海外博覧会本邦参同史料』第6輯, 博覧会倶楽部, 1934年, 58頁。
- 33) 「日英博覧会」『海外博覧会本邦参同史料』第6輯, 博覧会倶楽部, 1934年, 43~104頁。
- 34) 「日英博覧会」『海外博覧会本邦参同史料』第6輯, 博覧会倶楽部, 1934年, 52, 96頁。
- 35) 長谷川如是閑「日英博だより」『欧米遊覧記』朝日新聞社, 1910年, 548, 551頁。
- 36) 「日英博余興の活動写真」『活動写真界』日本活動社, 1910年1月25日号, 13頁。「アイヌの熊祭り」『朝日新聞』1910年2月17日付, 5面。
- 37) 「日英大博覧会——吉澤商店倫敦支店撮影」『活動写真界』日本活動社, 1910年6月25日号, 30頁。
- 38) 吉澤商店輸出部, 同倫敦支店広告『活動写真界』日本活動社, 1910年6月25日号, 頁なし。
- 39) 河浦しづえは瀬兵衛と12歳違いの1895年生まれ(『人事興信録 第四版』上巻, 1915年, 人事興信所, か-62頁)。
- 40) 栗本鋤雲に関しては成島柳北, 栗本鋤雲『幕末維新バリ見聞記——成島柳北「航西日乗」・栗本鋤雲「暁窓追録」』岩波書店, 2009年, および小野寺龍太『栗本鋤雲——大節を堅持した亡国の遺臣』ミネルヴァ書房, 2010年を参照。
- 41) 『人事興信録 第三版』下巻, 1911年, 人事興信所, く-59頁。
- 42) 東京女子学園編『創立五十年史 東京女子学園』東京女子学園, 1952年, 36頁。

- 43) 外務省『自明治四十四年五月一日至明治四十四年五月卅一日 外国旅券下付表 東京府』
- 44) 「栗本瀬兵衛氏」『読売新聞』1911年5月25日付, 5面。
- 45) 「吉澤商店 倫敦支店の拡張」『活動写真界』日本活動社, 1911年6月1日号, 30頁。
- 46) S. Kurimoto, "The Progress of Cinematography in Japan," *Bioscope*, October 26, 1911, p. 259.
- 47) 田中純一郎「連載 秘稿日本映画 第16回」『キネマ旬報』キネマ旬報社, 1965年12月下旬号, 65~67頁。田中純一郎「連載 秘稿日本映画 第17回」『キネマ旬報』キネマ旬報社, 1966年2月下旬号, 40~42頁。
- 48) 後藤勝造は日活の成立のみならず、台湾映画興行の発展にも重要な役割を果たしたと考えられる。勝造は丸マ・蒸気船問屋後藤勝造本店の創業者で、後藤新平や鈴木商店、台湾銀行などと協力し台湾の樟脳ビジネスを独占、財を成した。丸マは1895年以降、基隆の湾港荷役業を皮切りに沿岸航路網や陸上輸送網を台湾全土に構築、台北や基隆、淡水、新築、苗栗、台中、安平などに拠点をもっていたが、これらの多くは後藤新平の依頼で高松豊次郎が映画興行を広めた地域と重なる。
- 49) 社名変更広告『読売新聞』1912年9月12日付, 4面。
- 50) 吉澤商店広告『朝日新聞』1913年2月10日付, 6面。「吉澤商店輸出部の拡張」『読売新聞』1916年3月6日付, 5面。なお福宝堂のロンドン出張所については稿を改める。
- 51) 田中純一郎『日本映画発達史』第1巻, 中央公論社, 1975年, 201頁。平尾商会は前述したニーロップ日本貿易商会の後身。
- 52) 日活株式会社編『日活四十年史』日活, 1952年, 140頁。
- 53) 外務省『自大正二年一月至大正二年三月 外国旅券下付表 東京府』